

「日本福祉文化学会関西ブロック 現場セミナー報告」

関西ブロック 岡村ヒロ子

現在、日本は都会への人口集中と、一方では周辺地域の過疎化、限界集落化が進んでいます。限界集落では当然、高齢者が多く、生きがいつくりや介護・医療が大きな問題となっています。今回、日本福祉文化学会関西ブロックでは、そうした過疎集落を現場セミナーの対象地を選び、現地の人々と一緒に「高齢者の暮らし」を考えてみたいと思い、下記の内容で現場セミナーをもちました。

1. 兵庫県丹波市神地寺地区

・日にち：2012年3月19日（月）～20日（祝日）

・場 所：過疎集落丹波市神地寺地区

(1) 3月19日（月）

【第一部】現地の人々との座談会・現地見学

・テーマ：「丹波市定住支援事業の現状と課題 ～神地寺地区の今と昔～」

・場 所：高見さん宅、山崎春人さん宅

・参加者：自治会長 高見顕彦氏、丹波市定住促進会議委員長 能口秀一氏

丹波市定住促進会議副委員長 山崎春人氏

丹波市地域協働課定住促進係 河津千鶴氏・山崎和也氏

学会員（藤原一秀・岡村ヒロ子）

桃山学院大学大学院生（築地佑人・篠原剛志・田中翔）

【第二部】懇親会

・テーマ：現地の人々との交流

・場 所：丹波市立休養施設「やすら樹」（丹波市氷上町清住68-1 0795-82-0678）

(2) 3月20日（祝日）

【第一部】“丹波の正倉院と呼ばれる木彫仏の原郷”達身寺参拝

【第二部】シンポジウム

・テーマ：「過疎集落丹波市の高齢者の暮らしを考える」

・場 所：丹波市立休養施設「やすら樹」研修室

・パネリスト：丹波市社会福祉協議会地域福祉係 萩野和昌氏、能口秀一氏、山崎春人氏

・コーディネーター：日本福祉文化学会副会長 石田易司（桃山学院大学教授）

・参加者：福田（桃山学院大学教員）、学会員（藤原一秀・岡村ヒロ子）

桃山学院大学大学院生（築地佑人・篠原剛志・田中翔）

《3月19日》

自治会長高見さん宅に伺い、都会から移り住んで10年という方々、市役所の方々と「丹波市定住支援事業の現状と課題 ～神地寺地区の今と昔～」について車座で話し合いました。その席で「日本福祉文化学会」のパンフレットをお配りし、活動内容の説明と入会のお誘いをさせていただきました。

高見さんは町へ出た息子さんと同居なさったので、先祖代々続いた大きな旧家には現在、誰も住んでいません。高見さんは旧家を移住者に提供したいと考え、丹波市に申し出ました。丹波市は「定住支援事業」として、移住希望者と空家提供者のコーディネート、移住者への農業の研修等々、スムーズな移住受け入れに向けてさまざまな仕掛けをしています。

高見さんは市の定住支援事業とタイアップし、旧家を地元の人達と移住希望者との交流の場として提供し、丹波市の季節の産物を使った様々なイベントを定期的に開催しています。伺った時も翌日、蕎麦打ちを計画しているということで石臼が準備されていました。単なるイベントに終わらせず、移住希望者・空家提供者・市職員間で移住についての相互の考え方や希望者が地元の方々とのコミュニケーションがとれるかどうかの確認、受け入れ側からの情報提供の場とします。安易に田舎暮らしに憧れて移り住むのではなく、定住につながる事が大切なので、そのマッチングのために事前に十分な時間をもつとのことでした。移住者は農業に取り組むことが条件となるのでしっかりした考えをもったうえで、移住することが求められます。

四月から二人の子供をもつ35歳の若夫婦一家が高見さんの旧家に移住することが決まりました。今頃は、子供たちがあの広い家と庭と畑を元気に走り回っていることでしょう。

丹波市の高齢化率は30%を超え、高齢者世帯の増加、人口減少も進んでいます。先祖代々続いた家を手放し、農業もやめ、町へ出た子供と新居を構え、同居する人達が増えています。それに伴い、休耕地が増え、農業の存続も危ういのが現状だそうです。林業についても同様です。子供が減ったことで保育園は合併され、小学校も統合が進んでいるそうです。これでは町の活気も失せてしまいます。昭和30～50年代は農業も林業も盛んで、とりわけ寒暖の差の大きい丹波の松茸は美味しく、生産高も日本一を誇っていたそうです。「みそ汁の具がないから裏山の松茸を採っておいで・・・」そんな贅沢な時代だったとか。

今では、山は荒れ、酸性雨のため松茸はほとんど採れません。丹波米・但馬牛・野菜等々名産物は多いのですが、第一次産業の低迷が生産高の低下を招いています。こういった現状改善のために農業を目指す移住者の受け入れは必須なのだと実感しました。昔は、稲田の持ち主が体調を崩していたら近所の人たちが田植えをしてあげた、お彼岸の時には村の道づくりをしていた、隣り近所なにくれとなく、お互いに声を掛け合って助け合っていた・・・などなど、古きよき時代の村の様子を伺うことができました。時代の変化でそういったつながりが稀薄になってきたのは丹波市に限った事ではありません。

すでに移住して10年という山崎さんは、丹波の自然に溶け込むような家をご自分で建て、おおかた自給自足の生活をエンジョイしていらっしやいました。自然人そのもの。ふきのとう畑（信じられますか？家を建てる時に平地にするので削った土を盛っておいたら、によきによき生えてきたそうです。まさに群生、贅沢な話です）・ゼンマイ畑、椎茸・なめこ・・・、イタリアのボンベイを彷彿させるような煉瓦で作ったピザ窯、暖炉は薪・・・、そして広いウッドデッキ、ここで食べるバーベキューはさぞかし美味しいでしょう・・・。

山の勾配を活かした自然遊園、手作りの遊具に院生たちも無邪気に遊んでいました。もちろん、私も。「ここで都会の子を思いっきり遊ばせたい。遊びに来た子供たちはほったらかしておいてもいつの間にか上手に遊んでいる。自然の虫や花や木がおもちゃなんだ・・・。」とお髭の山崎さんはやさしく微笑んでいらっしやいました。山崎さんは自治会長を務めたり、祭りごとなどのイベントを企画する“マリオ倶楽部”を運営したり、奥さまは婦人会活動への積極的に参加したり、現在は丹波市定住促進会議副委員長に就任するなど、地元の方々とのつながりを大切にいらっしやいます。そういった姿勢が地元の方々に受け入れられ、また溶け込むことにつながったのだと思います。「田舎暮らしフォーラム」を大阪・神戸で数回、開催なさり、都会と田舎の架け橋となっています。

《3月20日》

「過疎集落丹波市の高齢者の暮らしを考える」というテーマでシンポジウムを開催しました。

初めに、社会福祉協議会地域福祉係の萩野さんから、丹波市の人口動勢、高齢者人口、世帯数、社会福祉協議会の配置状況と役割、介護保険事業の実態等々についてお話をさせていただきました。人口が6年間で4369人減という現状が市の「定住支援事業」につながったわけです。丹波市は「里山らしいこと」「都会から比較的近いこと」「自然環境が厳しすぎないこと」から移住希望者には人気が高いとのことでした。希望者の年代層は一時期の団塊の世代からそのジュニア世代に移ったそうです。若者世代が、自然の中での子育て、安全・安心な食べ物、森とのかかわりを選択するという価値観の転換が反映したのではないかと分析なさっていました。

定住条件として「都会での落伍者は続かない」「人間関係が結べる」「丹波の気風になじめる」ことがあげられました。

地域によっては「五人衆」という見守り・監視役という慣習が残っています。地元では移住者に対して「どんな人が入ってくるかわからない」という不安があるので、安心して受け入れられるような仕掛けが必要で、よりすぐられた人を選ぶことを第一に考えているそうです。

世代によって課題も異なり、子育て世代では、園児・児童の減少で保護者が何役も担わなければならない、若者世代は地元には仕事がないため、帰れない、農業を営む人たちは「米は買った方が安いので耕地を売りたい」と早期退職を希望している、団塊世代は意外と人付き合いが苦手等々、それぞれが深刻です。祭りごと山車の担ぎ手がないため、隔年の開催にせざるをえなかったり、簡素化しているそうです。文化的な行事への参加度が低いことは集まるきっかけが少なくなることにもつながり、町そのものの運営も難しくなっているようです。市役所がネットワーク推進委員会をつくり、移住組も巻き込んだ町づくりの具体的な仕掛けを社会福祉協議会が担っています。自治会への加入率も70%と低いのですが、賃貸住宅居住者の方が意外に高いそうです。祭りなどの文化的な行事の時に若者が故郷に戻ってこれるシステムづくりをしなければ伝統文化そのものがすたれてしまいます。

高齢者の暮らしの現状については、75歳以上の高齢者世帯の増加、外出時の足不足、医師不足が深刻です。介護保険で要支援・要介護の認定を受けても、遠慮や介護サービスを受けることへの抵抗感をもっている方、SOSが出せない方もいらっしゃいます。地元の大病院は経営不振、診療所は医師不足、往診にはなんとか応じられる状況と聞き、医療問題は全国的だと感じました。市の“おでかけサポート”としてタクシーを安く使えるサービスは人気があり、移動の保障は大切だと思いました。

「老後はどうするの?」という質問に能口さんは「宝塚市に70歳代の両親がいる。二人とも好きなことをやっているから、まだまだ丹波暮らしができる」山崎さんは「やることがたくさんある。老後のことは、その時、考えるよ」、とあっけらんと答えていらっしゃいました。

《後記》

福祉文化学会として何ができるか、それは、田舎の文化を、自然の文化を次の世代につなぐことでしょうか……。学会員間で考えていきたいと思いました。

地元の方に私達に求めたいことを伺ったところ、「多くの学会は物事を都会の目線で見ている。現場セミナーをするのであれば、田舎からの発信に耳を傾け、目を注いで欲しい」とおっしゃっていました。こちら側が仕掛けるのではなく、あちら側の仕掛けにどう乗るかだと思います。主導は私たちでないということです。多くの学会員に伝えたい一言でした。

せっかくできたご縁を大切に紡いでいきたいと思います。



《車座で話し合い》



《かまど》



《高見さんの家と耕地》



《山崎さんの家》



《ピザ釜》



《自然遊園》



《シンポジウム》



《集合写真》